

就労支援分科会報告

社会福祉法人みどりの樹 寺田 志のぶ

働きたい気持ちと向き合ってきた「これまで」と「これから」

——就労選択支援を通して考える、意思決定支援の本質——

「はたらきたい」。

支援の現場ではごく自然に交わされる言葉ですが、その思いを私たちはどれほど丁寧に受け止めてきたでしょうか。

就労に向かうこと自体が目標となり、制度や支援の流れの中で、本人の迷いや違和感が十分に言葉にされないまま進んできた場面も少なくないのではないのでしょうか。

本分科会は、今年十月に施行された「就労選択支援事業」を一つのきっかけとして、「はたらきたい」という気持ちと支援者がどう向き合ってきたのかを振り返り、意思決定支援の本質を改めて考えることを目的に開催されました。

制度理解ではなく、支援の本質を見つめ直す

就労選択支援事業は、従来の就労アセスメントが形式的になり、本人の意思や希望が十分に反映されにくかったという課題を背景に生まれた制度です。しかし、制度が新しく整ったからといって、支援の質が自動的に高まるわけではありません。制度をどう使うか以上に、制度と向き合う支援者の姿勢そのものが問われています。

本分科会では、給付構造や制度の詳細を理解することよりも、制度が生まれた背景にある権利擁護の視点や、地域や現場が抱えてきた課題に目を向けることを重視しました。就労支援部会として、日々の支援の中で出会う「はたらきたい」という思いに、私たちはどのように向き合い、受け止めてきたのかを振り返り、支援の本質を点検する時間としました。

平野潔氏による事例提供

相談支援の立場から見つめる「はたらく」という営み

話題提供では、Mネット東遠の平野潔氏が、相談支援専門員として関わってきた複数の事例を通して、「はたらく」という営みの意味について語りました。

平野氏は冒頭、「就労選択支援は、制度をどう使うかという話ではなく、私たちがこれまでどんな支援をしてきたのかを問い返される制度だと思っています」と述べ、参加者に強い問題提起を行いました。

紹介された事例の一つでは、長く就労を続けてきたものの、本人の中に違和感が積み重なり、結果として離職に至ったケースが語られました。

「周りから見れば『こんなにいい職場なんだから、もったいないよ』と初めは言った。でも、彼女が違和感を覚えながら続けてきたことに気づいた時に、がんばって仕事しようよとは言えなかった。」と平野氏は振り返ります。

「働き続けることだけが、その人にとって本当に良い選択なのか、立ち止まって考えざるを得なかった」と語られた言葉は、支援者の葛藤を率直に表すものでした。

なぜはたらくのか。それを学ぶ機会のない人たちがいる。お金を稼ぐことだけを目的に人ははたらき続けることはできない、それに気が付いたのかもしれない。誰が就職したのか、就職がその人の目標なのか。と様々な疑問を投げかけられました。

また、四十代で初めて仕事に就いた当事者の事例では、「生まれて初めての仕事を『楽しかった』と語った」というエピソードが紹介されました。「面白かった、新鮮だった。最初は、お金が増えることが成長だと思っていた。でも、やりがいがないと……って思った。」と話すようになったと平野氏は語ります。はたらくことの「楽しさ」の意味とはなんでしょうか。

そして、五十年間引きこもっていた方が作業所に通うことになったエピソード。

「ここに来られてよかった」という言葉が聞かれるようになったといいます。人の中に役割というつながりを持つこと。どこにしあわせを見出すことができるか。そこにもはたらく理由があるように思います。

平野氏はこれらの事例を通して、「人それぞれ、はたらく理由がある。お金だけでなく、人とのつながり、自分の時間、役割や責任、やりがい、しあわせの実感など、あたりまえのことを求めてはいけないのか」と語りました。そして、「制度をどうつないだりかえたりすることができるのか。どうかたち作っていくのが我々の仕事」と投げかけました。

意思決定支援とは何か

平野氏は「意思は誰にでもあるものでそれを掘り出す、と考えるよりは、人と人との間に意思があつてふわふわと浮いているようなかんじ、と捉えている」「意思決定は、選択の集大成」と語りました。

「選択の豊かさを決定するのは、その人にどれだけ豊かな選択肢があるかということ」と、支援者が選択肢を用意することについても、「質の悪い選択肢を出してしまうことを、私たちはとても怖がっている」と率直に語られました。その背景には、「失敗したときにフオーできるのか」「責任を取れるのか」という支援者側の不安があります。しかし平野氏は、「よい結果も、そうでない結果

も、その人の人生の糧になっていくと信じる覚悟が、意思決定支援には必要なのではないか」と問いかけ、「共に迷いながら、待つことも支援の一つ」だと締めくくりました。

意見交換から見えてきた共通認識

意見交換では、就労選択支援が就労への誘導や選別につながってしまうのではないかと懸念や、現場での運用に対しては、せっかく制度ができあがって意思決定支援をしつかりやっていこうという流れの中で、これまでと同じ流れになってしまっているのではないかと戸惑いが率直に共有されました。

一方で、「はたらく以前に、安心できる居場所や関係性があることが何より大事」「役割がある場所こそが支援の土台になる」といった意見が交わされ、参加者間で共通認識が深まりました。

また、「意思決定支援とは、その場面だけを切り取って行うものではない。本人の周りに、量的にどれだけ豊かな関係性をつくれているか」という意見もあり、参加者それぞれが「意思決定支援」について自身の支援を振り返り、考えを深めることができたのではないかと感じられる時間でした。

おわりに

本分科会を通して、就労選択支援事業は新たな制度として捉えるだけではなく、支援者一人ひとりがこれまでの実践を振り返り、「はたらかたい」という思いにどう向き合ってきたのかを問い直すための重要な枠組みでもあると確認しました。

「制度をどう使うかではなく、制度を通して自分たちの支援をどう点検するのか」。平野氏の言葉が象徴するように、意思決定支援の本質を改めて確認する機会となりました。